

鈴木梅太郎先生の記念碑

日本での、農芸化学という学問の大先達としての鈴木梅太郎先生のご偉業はすでに広く知れわたっていることである。ある機関の創始者、ある物の発明・発見者、社会に大きな貢献・感銘を与えた人などを記念する像や碑が数多く見られるのに、残念なことに鈴木先生に関するものは何もない。

ところでここに掲げた写真の碑は、岩手大学農学部（旧盛岡高農）構内に建てられたものである。碑文は「盛岡高等農林学校校舎跡」、その下に小さく「鈴木梅太郎によりビタミン研究ここにはじまる 1906 年」「宮澤賢治ここに学ぶ 1915~1918 年」と二行に明朝活字体で刻まれている。そのいきさつについて書いてみたいと思う。

鈴木先生は明治 29 年帝国大学農科大学を卒業され、大学院を経て 34 年から 5 年間欧州に学んだが、その後半は主としてベルリン大学のエミール・フィッシャー教授の下で有機化学、とくにタンパク質化学の研究をされた。39 年 5 月に帰国と同時に盛岡高農の教授に任せられ、「日本では日本のテーマで研究するように」というフィッシャー教授の助言により、わが国の主食である米を研究の対象とし、当時日本の風土病といわれた白米病（かっけ）の研究に着手された。同年 9 月には東大助教授の兼務が発令され、その後間もなく東京に居を移された。それ以後は本務である盛岡よりも、兼務である東京滞在の方が長くなつたことから、当時の玉利喜造校長から、減俸にすると言い渡されたとのエピソードも残つ



大正 6 年頃の鈴木梅太郎先生

ている。しかし諸先輩の話によると、先生は盛岡に大変愛着を持たれ、大正 6 年に非常勤の講義を止める（賢治はその最後の講義を受けている）まで、後輩・学生の研究指導もされたといわれ、その後の校友会報にもいくつかの論文が残されている。そうはいっても地方での研究はどうにもならないもどかしさがあったことは当然のことと思われる。記録によると、明治 35 年に発足して間もない高農の化学実験室は、市内に電気が通じたのが明治 38 年で、ガスは学内で鯨油を乾留して使用し、水道は天井から配管され、蛇口は 1/2 インチパイプの切り放して、水流ポンプもつけられない状態だったという。さらに、数年後オリザニン発見に際して一刻を争うフンクとの論文発表の経過のあったことを考えると、外国文献の不足は有機化学の最先端をゆく先生にとってまさに致命的な遅れを感じたことであろうと察せられる。

ともあれ盛岡滞在の一年足らずの間に、鶏の白米病についてオランダのアイクマンの追試実験を行い、米糠の添加は白米病に効果のあることを確認することができ（鈴木梅太郎先生伝 130 頁），以後駒場の農科大学へ移ったあと、この研究を継続してその有効成分を糠から分離精製してオリザニン（ビタミン B₁）の発見、発表へと展開したわけである。先生の最初の学会誌での発表は、東京化学会誌 32 卷、4~17 頁（明治 44 年）である。その 5 頁目に「……有害なる微生物が之に寄生し為に疾病



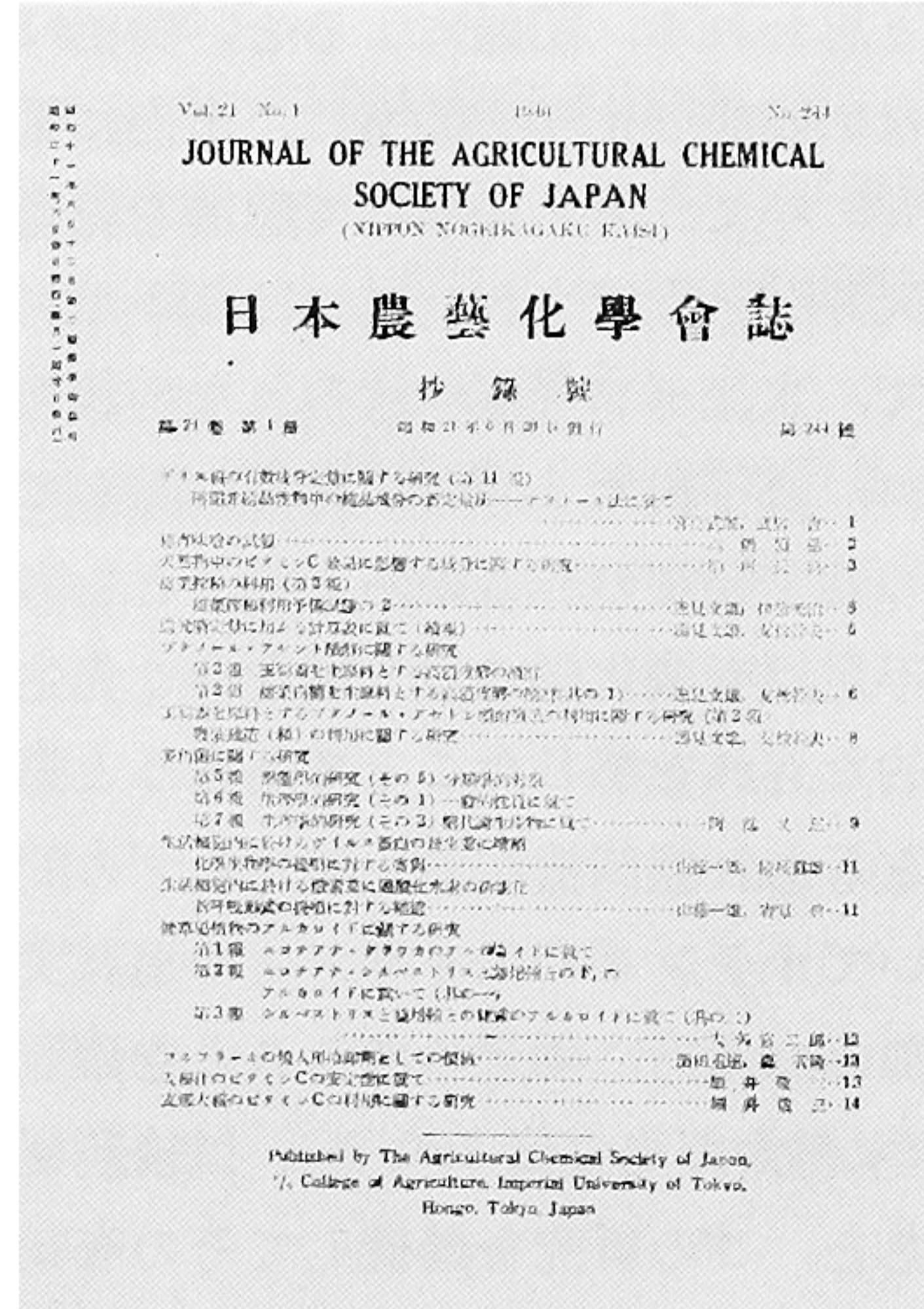
鈴木梅太郎先生の記念碑

を惹起すると考ふるものありしが其後種々の研究によりて全く白米中に動物の生活に必要な或る物質が缺損するに由るものなること疑ふべからざるに至れり」とある。つまりこの有効成分は単なる白米病に効く薬ではなくて、微量で有効な“新栄養素”であるという世界で最初の宣言であるこの記述は、現在でも千金の重みを感じさせるものである。

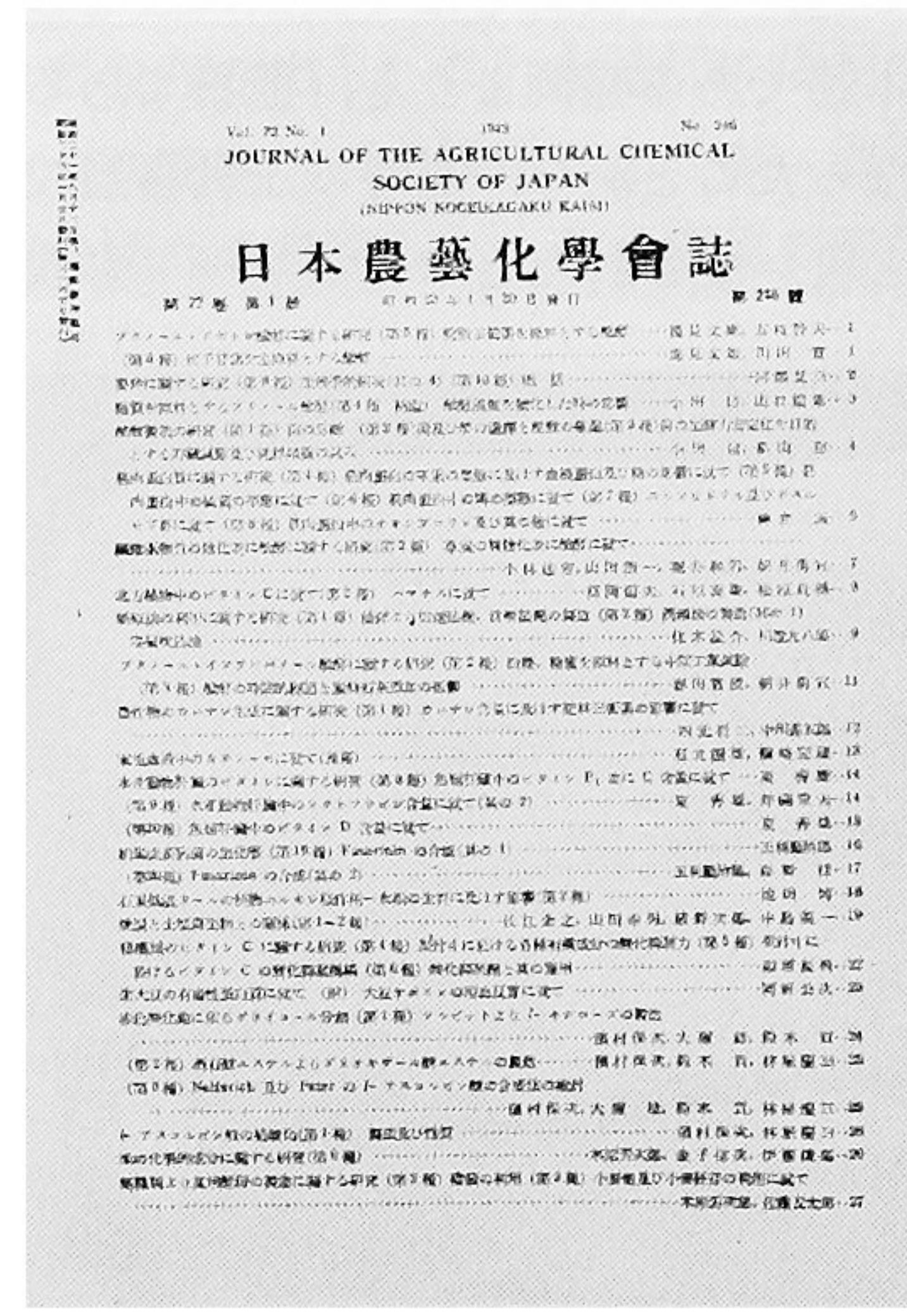
先生没後 40 年を記念して岩手大学農芸化学科の教官有志が、この事実をもとに先生の記念碑を建てたいとの発案があったのが昭和 57 年の秋のことだった。諸先輩の意見を聞いてみると、「先生の高弟で御健在の方がまだ沢山おられる。あえて、初めての先生単独の記念碑と

なると色々と異論も出るだろう。一地域のある記録だけで勝手に建てるわけにもゆくまい」という慎重な忠告もあって、卒業生有志の醸金により結局写真のように、学制改革のもとに消えた過去の校舎跡を記念する碑のなかで、光榮ある歴史を後世に伝える具象として、先生と賢治の名を残そうということになったわけである。ここは鶏を飼育した鈴木研究室の跡地である。諸兄ご来学の折があれば是非お立寄りいただき紹介する次第である。碑の裏面には「1983 年 10 月 8 日 有志」とのみ刻まれている。

(小田切 敏)



第 21 卷 (1946) の表紙



第 22 卷 (1948)～第 28 卷 (1954) まで